

研究ノート

戦前昭和期の少女小説における 音楽のたしなみの表象

歌川 光一

The Representation of Music Skills in Stories for Young Girls in Prewar Showa Period

Koichi Utagawa

1. 問題の所在

本稿の目的は、戦前昭和期の少女小説における音楽のたしなみ¹の表象を明らかにすることにある。

今田絵里香は、戦前期の都市新中間層を含む中上流階級²女子（以下、本稿において「女子」と略記）が唯一成功の手段と捉えたのが、近代西洋芸術のプロになる道であり、これを「芸術主義」と名づけている。今田によれば、近代西洋芸術のプロになるには、多くの文化資本が必要であったため、たとえそれに憧れを抱いても結果として大半の女子は、そのような成功を収めることはできなかった。したがって、「芸術主義」は女子に憧れを抱かせながら、それに失敗しても、「努力」や「才能」の無さとして納得してクーリングアウトさせ、結果として家庭に収める巧妙な社会的装置として機能した（今田2007：129-132）。今田が指摘するような、女子にとっての擬似立身出世主義としての「芸術主義」の発見は、戦前期の女子特有の成功観を示唆した点において意義深いものである。

一方で、戦前期にける同階層の女子は、近代西洋芸術のみならず、伝統的な和漢の教養や、茶道、華道、箏、三味線等の遊芸などもたしなみの対象としており（稲垣2007）、また、大正期頃、妙齢の女子は趣味の豊富さ（Hobbyの数）を示すことが良縁につながるという言説が広まっていた（歌川2015）。これらの伝統芸術・芸能も対象に含む、アマチュアとして「たしなむ程度」の芸術・芸能への関わりは、「少女」の表象の中にどのように位置づいていたのだろうか。本稿は、たしなみをめぐる「伝統／近代」の考察が行いやすい音楽に着目し（歌川2014）、戦前期の代表的少女小説中の表象を明らかにすることで上記

1 「たしなみ」の語用については歌川（2014：194-195）を参照されたい。「（お）稽古（事）」という概念を採用する時、主として学校外で、「いつ、誰に、どのように習ったか」という、教育機会や教育方法、学習プロセスが問題となるが、「たしなみ」という概念を採用する時、コト・モノを身体化し、披露の準備が整いつつあるという主体性を表現することができる。

2 階層認識については、佐々木（2012）に従っている。

の課題に迫ろうとするものである。

「少女」の表象と音楽の関連について、今田（2007）は少女雑誌に登場する「明るさまに肯定的な意味づけがなされている女性」の量的分析とともに、『嵐の小夜曲』（横山美智子作）、『君よ知るや南の国』（加藤武雄作）等の少女小説の分析から、「親きょうだいの経済資本・文化資本・社会関係資本」「少女自身の社会関係資本」といった、芸術家としての職業達成の条件を指摘している（今田2007：122-125）。

また玉川裕子は、邦楽のたしなみにも配慮しつつ、大正期の『少女の友』の分析を行っている。玉川は、口絵、挿絵、小説、広告などに着目しながら、第一次世界大戦勃発前後までは、箏とピアノは「経済的にゆとりのある家庭の娘をあらわす記号として、あまり差がない」（玉川2008：16）こと、1920年代には「箏／それ以外の和楽器で形成されていたポジティブ／ネガティブの対比が、洋楽器／和楽器という対比に移っていき、箏がかつて帯びていたポジティブなイメージが薄れはじめていく」（玉川2008：29）こと、ただし、「形状からしても移動が困難で、いずれかの場所に固定されざるを得ない」（玉川2008：35）ピアノの方がヴァイオリンよりも良妻賢母像に適していたことを明らかにしている。

2. 分析の素材

本稿は玉川（2008）の関心を引き受けつつ、戦前昭和期の少女小説を分析の素材としたい。具体的には尾崎ほか（1993a, b）に掲載された少女小説を対象とする。同大系は「昭和初年代を頂点とする全盛期の少女小説の、かくれた名作を紹介するもの」（遠藤1993a：607）である。

小説からたしなみを読み取る試みに野口（2009）、近代日本の音や音楽のたしなみを読み取る試みに中村（1976）、安（1987）、樋口（1996）、玉川（1998）、高橋（2001）等の研究がある。「身体はそれが組み込まれた社会的な『場』の共時的構造や通時の変化を雄弁に映し出す記号であり、「それが明示的に主題という衣装をまとうていなくても、大半の文学作品には身体への直接的言及や間接的参照が遍在している」（石井1998：19）ことから、本稿でも少女小説上の音楽のたしなみを読み取る作業を試みたい。

なお本稿では、「少女小説」を『少女倶楽部』派と『少女の友』派に大別して考察する。遠藤寛子によれば、「少女小説」は作家と作品によってのみではなく、「健康で強烈的な娯楽性に富み、それゆえに通俗性と大衆性を指摘される『少女倶楽部』派と、繊細で優美な抒情性にすぐれ、反面軟弱と感傷過多を非難される『少女の友』派」の二派に分けることができ、読者基盤も前者が地方型、後者が都市型であった（遠藤1993a：607）。遠藤によれば、『少女の友』など主要誌5誌が凌ぎを削る中で、1923年に『少女倶楽部』が創刊され、ページ数の多さ、作品数の多さ、大懸賞、教訓モノ、教育関係者の記事といった誌面作りによって地方で多数の読者が同誌に移動していったが、昭和を迎えた頃、『少女の友』は編集者内山基の方針により、「読者対象を女学校上級生までひろげること、大都市、それも東京の、主として山の手の女学生に標的をしぼること」によって、『少女倶楽部』と

の差異化を図ることとなった。戦前昭和期において少女小説は、まず各少女雑誌に掲載され、その後単行本化される形態であったため、掲載作品の性格をある程度規制することが起こり、「二誌対立即少女小説二派並立の時代を迎えることになった」(遠藤1993a: 607-609)。尾崎ほか(1993a,b)は、少女小説に対して『少女倶楽部』派/『少女の友』派という分類が可能であることを証明するような作品が選ばれている(遠藤1993a: 607)ことから、本稿でもこの分類に従って音楽のたしなみの表象を考察する³。

3. 『少女倶楽部』派少女小説における音楽のたしなみ

(1) 洋楽の才能の発揮

今田(2007)によって既に検討がなされている「君よ知るや南の国」「嵐の小夜曲」も含め、『少女倶楽部』派少女小説に登場するのは洋楽のみであり、登場人物がそれをたしなむようになった理由は触れられず、才能の発揮に表現の重点が置かれている。

「月の砂漠に」(龍胆寺雄作)は、義理の母の冷たい仕打ちに耐えながら生活する、姉・襟子、弟・一也の姉弟が、それに同情する富豪の病身の青年と懇意になり、青年は最後に多くの遺産を弟・一也に残して亡くなるというストーリーである。以下は、襟子が一也に連れられ、初めて青年の家に向かう場面である。

松林を広広ととり入れた庭の奥に、大きな建物が幾棟か、瓦屋根を月光に光らせて、ひっそりと沈黙し、その中の、いちばん海の方へ向いてつきでた平屋根の大きな一と棟だけ、明るくあたたかく窓に灯りがともって、そちらから、蓄音器らしい音楽の音がきこえてきた。

ちょっと耳をすませていた一也が、襟子を振り返っていった。

「お姉さま、識ってる？ ベートーフェンの月光の曲だね」

「そうね。おしまいの方だわ」

(尾崎ほか1993a: 544)

このような豊富な音楽の知識は、姉弟の本当の父親が「西洋美術史の権威で、あのクリートの迷宮として識られたクリート島の古代王宮の発掘に、唯一の日本人学者として参画したりして、海外にも名を識られていた」(尾崎ほか1993a: 552)という出自の良さによって補われている。

また、「心の王冠」(菊池寛作、『少女倶楽部』1938年1月～39年12月掲載)は、主人公・真室町子(女学校3年生)が、生活全般を遠山家に援助されることとなり、遠山家の娘・典子に顎使され、嫌がらせを受けつつも、担任の村田先生や侯爵令嬢の美年子姫の好

3 以下、尾崎ほか(1993a,b)所収の作品については「」で示すこととし、引用に際しても尾崎ほか(1993a,b)中の頁数を示すこととする。また、各作品の概要については、特に断りのない限り、遠藤(1993a,b)および岩淵ほか(2015)を参照した。

意で声楽の道に進み、世界で認められる歌手となって帰国し、典子を伴奏者に抜擢するというものである。町子は学芸会で来賓として訪れた美年子姫に才能を見出されている。

令嬢〔美年子姫…引用者〕は、アメリカの少女に扮した女生徒〔町子…引用者〕の歌声が、一番美しいと思った。この人は、練習をすれば一人前の歌手になれるのではないかと思った。

(尾崎ほか1993b: 367)

(2) 反転する洋楽のたしなみ像

一方で、ピアノを始めとする洋楽への強い憧憬は、敵役の虚栄的なたしなみの象徴としても描かれる。

「一つの路」(北川千代作、『絹糸の草履』)は、「私」が汽車で乗り合わせた少女から、障害を持つ美しい長姉が、好きだった青年と次妹が結婚することを知って、架空の男性との心中を装って沼津の海で自殺したという身の上話を聞くというものである。少女は末妹であり、長姉の無念を思いつつ長崎に向う最中である。長姉の恋敵となった次妹は、「女学校を出ると、もうその上の学校へは行かずに、うちでピアノだのなんだののお稽古をして暮していました。派手者で交際家で陽気なことの好きな小姉さまの周囲には、そうした生活を初めると一緒に、かなり大勢の若い人たちが集まって来るようになりました。建兄さまのお友達の中でも、小姉さまのために家へ足を運んでくる人がないともいえない位、小姉さまの生活は派手で明るいものだったのです。」(尾崎ほか1993b: 92)と表現されている。

「月の砂漠に」において、襟子の義理の妹、千鶴子と和歌子は、ピアノの島崎先生に渡す月謝400円を一也が盗み、高価なチョコレートを購入したのではなかと嫌疑をかける。一也と襟子が帰宅すると、「応接間では、千鶴子が白々しい顔をしてピアノをひいて」(尾崎ほか1993a: 536)いる。

「心の王冠」において、主人公・町子に意地悪をする典子の部屋は「草花模様の赤い絨毯の敷かれた部屋で、片隅には立型のピアノが置かれてあり、机といい椅子といい、女学生らしくもない豪華な部屋」(尾崎ほか1993b: 371)と表現されている。

4. 『少女の友』派少女小説における音楽のたしなみ

(1) 憧れとしての洋楽のたしなみ

『少女の友』派少女小説においては、『少女倶楽部』派同様、登場人物の洋楽への憧れが表現されているが、あくまで日常生活上の一場面として登場する。

「司馬家の子供部屋」(吉屋信子作、『少女の友』1936年1～10月号掲載)は、東京・「千駄ヶ谷の神宮外苑に程近い住宅地」(尾崎ほか1993a: 272)の一軒貸家であつまく暮らし始める画家の子どもたちの様子を描く。長女・美穂子(15歳、女学校3年生)は「気性の烈しい反面に、空想家で夢見る子で、しかも文学的才能に少し自信をもってい

(尾崎ほか1993a: 276) する。次女・喜久子(14歳)は、「もの優しく女性的でつましく、忍耐強く、現実的實際家」(尾崎ほか1993a: 276)である。喜久子の弟で長男・融(10歳)は、「天性が、ひどく敏感な繊細な少年」(尾崎ほか1993a: 276)である。この下に、三女・満寿子(7歳)がいる。次女・喜久子は作品中、姉の美穂子より大人らしく、つましいキャラクターとして描かれるが、4人共同で利用する子供部屋について、「ベビーオルガンはずかしいなあ、やっぱりピアノでも置かなくちゃ」(尾崎ほか1993a: 278)と感じており、美穂子が乗り気になって家庭内で発行している「家庭しんぶん」にも、「いまにお父様の絵が売れて、ベビーオルガンの貧弱さの代わりに、牛の様に大きなピアノが子供部屋に置かれたら、どんなにいいだろうと思って居ます。」(尾崎ほか1993a: 282)と感想を寄せる。また、「幼ないハモニカの天才」で「もう、ダニユーブ河のさざなみなぞ、ちゃんと不思議なほど吹ける」(尾崎ほか1993a: 278)くらいの腕前の融が父に画が売れた際にアコーディオンを買ってもらった約束を取り付けたと聞き、喜久子は「お姉さん、私だち、小馬鹿ちゃん〔満寿子…引用者〕と、女の児三人同盟で、ピアノをって、願書をお父さんに呈出しましょうよ、でも、いまはまだ買えない!」(尾崎ほか1993a: 301)と声を荒らげている。ただし、この喜久子の願いは結末には影響しない。

「チビ君物語」(由利聖子作)は、チビ君(初子)が家族の留守の間、母の旧主家の利イ坊様の家に、居候兼お手伝い見習いのような形で預けられるというものである。その後、家族の帰国と共に、チビ君は利イ坊様の父の紹介で女学校に入学し、チビ君の家族は、利イ坊様の兄の修三様の世話で見つかった家で洋品店を開業する。「続チビ君物語」はチビ君が女学生になってからの章を集めているが、「チビ君物語」で既にストーリーが通っているため、全体を流れる筋のない短篇集となっている(遠藤1993b: 550)。利イ坊様の家の描写は「昭和初期の東京山の手の日常が作者の育った上層中産階級家庭生活に裏づけられ、ユーモラスなタッチの中に実にリアルに描写されている」(遠藤1993a: 612)とされる。利イ坊や修三様とチビ君の文化的な階層差は「チビ君物語」の冒頭から明確に表れている。

奥さまは、とても親切な方だった。修三さまのお父さまはこの春にアメリカへいらして、お帰りは来年だった。

利イ坊さまはたった一人の女の子で又末っ子だったから、チビくんには一寸苦手だった。年のわりにおマセである。おまけに幼稚園時代からF女学校の附属へ入って英語をならったし、小学校に入ってからもうフランス語をやっている。
〔中略…引用者〕

「バカねエ、チビくんのバカ、ユウミみたいなガルは、フウリッシュ・ガルと云うのヨ」と利イ坊さまはマセた赤い唇をトンガラかして、英語のわからないチビくんをケイバツしようと威ばるのである。

「何云ってんだイ、おシャマ奴。ガルとは何だイ?チビくんをいじめんのはよせヨ。

そんな事云っていじめんなら、お兄さんが、ドイツ語で利イ坊をやっつけるゾ」

修三さまはお医者さまの学校を受けるので、今年の秋からドイツ語を習いはじめたのである。そう云う風に云われると、今まで威ばってチビくんをやっつけて居た利イ坊さまは、恥しさと口惜しさとで真赤になりながら、チビくんをにらみつけるや、バタバタと西洋間の方へとんで行ってうのである。そして急にピアノのフタをあけて、「タンタカタッタッ……！」と怖い割れそうな音を出して「ミリタリイ・マーチ」がひびいている時は、チビくと利イ坊さまの国交はダンゼツしているものと思えばいいのである。(尾崎ほか1993a: 161)

「古いヴァイオリン」(島本志津夫作、『少女の友』1941年1月号掲載)は、女学生の夏子が、押入から母親の嫁入り道具の一つであったヴァイオリンを発見したのをきっかけにヴァイオリンの稽古に通い始めるというものである。

ケースをあけると、緑色のビロードを張った内側に、更に黒い袋につつまれたヴァイオリンが眠っていました。夏子は、急いで袋のひもをときました。絃は外してありましたが、美しい音色を秘めた楽器の女王が出てきたときの驚きよるこび—もしそのとき、火鉢や行李など邪魔なものが散らばっていなかったら、夏子はきっとヴァイオリンを胸に抱きしめて、踊り歩いていたことでしょう。

(尾崎ほか1993a: 418)

夏子と仲良しで、人がよく理性的に描かれている福田は、夏子が「すっかりその美しいメロディーのとりこになっ」(尾崎ほか1993a: 418)たヴァイオリン演奏会に誘ったり、「音楽好き」で、夏子より「一月ほど前からピアノの稽古に通って」たりと、音楽のたしなみの点において夏子よりも一歩先んじている。

「ねえ、中西〔夏子…引用者〕さん、二人で勉強して早く上手になりましょうよ」
「私のヴァイオリンにあなたのピアノの伴奏—考えただけでも楽しいわね」

(尾崎ほか1993a: 420)

夏子と福田は、実際に卒業生の送別会の余興というたしなみの披露の場が与えられるところで話は締められる。

「小さき碧」(松田瓊子作、1941年、甲鳥書林)は、高原で生まれ育った10歳の少女・碧が、インドに旅立った父母と離れて上京し、叔母(柴田夫人)家族のもとに一年間預けられる話である。以下は、従姉・早苗、従兄・睦夫に連れられて家の中を案内される場面である。

家の中はそんなに広くなかったが、碧の高原の家より倍の培位立派だった。殊に広間は明るく、大きなグランドピアノが置かれているなど、碧の眼を丸くするものは一ぱいあった。

「これ、誰が弾くの？」

碧は思わず、ピアノに走りよって聞いた。

「お姉様。」

「あなたは弾かないの？」

「僕は、ヴァイオリンの方が好きなの。」

睦夫は音楽を愛している少年のように愉しげにこう答えた。

「じゃ、音楽会が出来るわねえ。」

碧は熱心に言った。

「うん。君もピアノ弾くんでしょう？」

睦夫の間に、碧は首を振った。

「じゃ、習うんだよ、お母様がそう言ってらした。」

弟の言葉に早苗は眉をつり上げて、階下に下りて行ってしまった。

「あ、あ、あ、つまんない。あんな子供のお守りなんか、一」

早苗は廊下を走りながら、声を出して呟いた。 (尾崎ほか1993b : 456)

このように早苗、睦夫と碧には明確な階層差があるが、本作ではその点は重要ではなく、碧は、碧のホームシックを紛らわすための睦夫の応援や、病弱な渚の懇願によってピアノの腕を上達させていく。

「少女三銃士」(由利聖子作、『少女の友』1938年1～12月掲載)は、愛隣女学院校長先生の妹婿を父に持ち、我儘、天邪鬼な同校一年生の緒方自由里と、その腰巾着のウサコ、デメ金姫の3名で成る「おシャマ三人組」と、父を亡くし母と二人でパン屋の叔父家の世話になり、家業を手伝いながら同校に通学する主人公・小野松子ら3名で成る「ムツツリ三人組」が対立しながら、友情を深める話である。この「おシャマ三人組」はピアノに触れていることがわかる。

放課後になるとすぐ、増田さんがすまなそうにあやまった。遊びに行つてウサコさんのお兄さんの舞踏練習所でピアノをひいたり、レコードをかけたりして遊ぼうと思っていた二三人の連中はそれをきいてがっかりして了った。

(尾崎ほか1993b : 315)

(2) 登場人物への下町の印象づけとしての三味線／母親の文化資本の高さを示す筆

『少女の友』派少女小説が『少女倶楽部』派と大きく異なるのは、邦楽のたしなみも描写されていることである。

まず三味線については登場人物への下町の印象づけとして登場する。

「司馬家の子供部屋」の長女・美穂子自身は次女ほど音楽に関心がないが、「自分とまるで違ったような性質と型」であり「少し好き」（尾崎ほか1993a：306）な対象である同級生の三輪さんの「母一人、子一人の家庭」という境遇に「とても、ロマンチックだな」と感じている（尾崎ほか1993a：306）。

「うちの母さん、午後から夜まで、よそへ働きに、勤めているんですもの—」

三輪さんは、少しためらいながら、言うのだった。

「そう—」

と、それ以上、美穂子も、よけいなことを言わなかった、けれど、心の中で、この三輪さんの、お母さんと言う人は、いったい、どんな商売をしているのかと、考えてしまった。

女優かしら、午後から夜遅くまで、舞台上で働くって言えば、でも、三輪さんの母さんが、女優なら、少し年齢とった女優だな—

それとも、芸者！それは、夜三味線をひいたり、踊ったりするらしいからまさか—でも、三輪さんは、そう言えば、色白の細面の日本式美少女で、紺の制服よりは、友禅模様の長い袂のキモノが似合そうな、しなしなしたひとだもの—

そして、長唄や踊を、小さい時から、習ったと、いつか言ってたし……

（尾崎ほか1993a：306）

「街の子だち」（吉屋信子作、『少女の友』1934年1～12月号掲載）は、東京・下町の酒類小売店の娘照ちゃん（小学校6年生）と、その幼馴染で質屋「福澄」の娘で「痩せて身体も弱く子供の頃は病気勝」、「学校の出来は好いのですが気性が優しくて大変おとなしい」（尾崎ほか1993b：104）敏ちゃんの中に、同年齢で「色の澄んだ上品なお顔で眼が綺麗でいかにも大きなお邸の小さいお姫様のように」な山の手風の久美子加わる（3人とも高等女学校受験を控えている）ことから話が展開する。「照ちゃんは今まで自分にばかり従がいついて居た敏ちゃんがどうやら新友の久美子さんに非常な興味を持つ様子を少し不愉快に思」（尾崎ほか1993b：117）うようになっている状況下で、久美子の母が照ちゃんと敏ちゃんを食事に招く。

「これから久美子もお仲間に入れて頂戴ね」

久美子さんが申しました。

「ホ……でもお神酒徳利〔照ちゃんと敏ちゃんのこと…引用者〕は二本揃うのですよ、三本になるとお困りでしょう」

〔中略…引用者〕

でも敏ちゃんは一生懸命に考えました。ここでも黙っていれば、久美子さんをは

ぐぬけにして三人仲よしにしないという事になるのですから—それでやっと敏ちゃんが頭をひねった結果言い出しました。

「でもお三味線の糸は三本揃っていますわ」彼女一代の智恵を現しました、と言うのが敏ちゃんは長唄のお稽古に姉さんと通っているのですから、それでお三味線の絃を考え出したのです。(尾崎ほか1993b:120)

ここでは、長唄のお稽古に通っている敏ちゃんが、音楽には縁遠い照ちゃんと、山の手風の久美子をつなぐ役割を果たしている。

一方、箏は母親の文化資本の高さを示す場面で登場する。

「少女三銃士」では、方方の会社の重役をやっているお父さんを持つ「デメ金姫」は、「家へ遊びに来ていただいてもいいけど、家も今日はちょうどお母様のお琴の会で沢山お客様がいらっしゃる筈だし…」(尾崎ほか1993b:315)と述べる。

「英語と寝言」(由利聖子作、『続チビ君物語』)では、「お琴なるものを好かない」(尾崎ほか1993b:241)修三様が、母の指導の下で利イ坊と共に箏の稽古に励み、自分が指導する英語の稽古に集中しないチビ君に苛立つ場面が散見される。

利イ坊様のお母様は、とてもお琴がお上手である。一時ちっともおひきにならなかったが、又近頃時々出しておひきになるのであった。

[中略…引用者]

お母様はきれいな指さばきで、シャン、シャンと調子を合わせていらっしゃる。「何時頃から、お母さんは琴なるものをたしなんだんです？」

と、まだ修三様は何か言おうと質問にかかる。

「十ぐらいの時から」

「へえ、じゃ、もう相当うまいんだな、それでも……」

「それでも、とは、ひどいわね。今はもうテンデ駄目だけれど、パパんとこへ来た当時は、まだうまかったのよ。パパが時々ほめて下さったわ」

(尾崎ほか1993b:240)

ゴロンと仰向けに寝ころがって、お机の上に足をのっけて(少うしお行儀がわるいけど)、(どうして女の子ってものは、あんな琴なんでものを弾きたがるのだろうか?)などと、ボンヤリ天井を見ていると、シャン、ツン、ツンと、チビ君の弾くらしい音がきこえて来る。

「ホラ、そこをおさえて、ギュッと。そう、もっとギュウツと—」お母様が教えていらっしゃる。ククくと、はずかしそうな嬉しそうなチビ君のしのび笑いが聞こえて来る。ツメをはめた手を唇にあてて、真赤になって恥ずかしがっているチビ君の姿が、目の前にハッキリ浮かんで来る。

「あたしと初子ちゃんと、どっちが上手いのオ。え、お母様？」

利イ坊様の声がある。(何て答えるかしら、お母さん) と、ちょっと修三様は耳をすました。

「両方とも上手いわ、中々」

「私、初子ちゃんより一週間も早くやり出したのよ」

利恵子の方が上手いわよ、と言ってもらえないので、利イ坊様はヤッキになっている。(尾崎ほか1993b：241-242)

ここで注目しておきたいのは、既述のように利イ坊は、チビ君が出逢ったときからピアノをたしなんでいたが、その後、心得のある母から箏の稽古を受け始め、新鮮なものとして楽しんでいる点である。「チビ君物語」「続チビ君物語」において、箏はピアノとは差別化されたたしなみの対象である。またその習得過程についても、母親から稽古を受けるという利イ坊の文化的環境のレベルの高さが如実に表されるのに対し、チビ君は「ツメをはめた手を唇にあてて、真赤になって恥ずかしがって」、箏を習うということに気恥ずかしさを覚えながら楽しむ様子が遠くの修三様からもわかるとされているように、両者の埋まりようのない階層差が描写されている。

(3) 職業には結びつかない音楽のたしなみ

既述の「古いヴァイオリン」においても、プロを目指すために習得するのではなく、たしなみに留めておく(おかざるを得ない)ことが母親から夏子へ教訓的に述べられている。

「でも、どうして、今まで一度もおひきになりませんでしたの？」

「それは、この家のおばあさんが、およろこびにならなかったからです。私がヴァイオリンをひいていると、新しいもののきれいなおばあさんは、ひどく不機嫌な顔をなさるのでした」

「しかし、おばあさんは、私が三つのときにおなくなりになったのでしょうか。そのあとはお母さんの自由ではありませんか？」

「女というものは、そう自分の思う通りのことができるものではありません。子供に手がかかるし、家の仕事は忙しくなってくるし、ついそのままになってしまいました。忘れられたヴァイオリンは、押入のなかですすり泣いていたかもしれませんね」(尾崎ほか1993a：418)

「お母さんは、自分の娘をヴァイオリン弾きにしようと思って先生につけているわけではありません。ヴァイオリンを上手にひくことも大切ですが、しかし一つのものに打ちこんで、それを仕上げて行くひたむきな心は、若い娘にとってもっと大切なものです。練習曲がつまらないからといって、やめてしまうような気の弱

いことでは、世の中へ出てどうしますか？」 (尾崎ほか1993a: 427)

同様に、既出の「英語と寝言」においても、箏の稽古について面白く思わない修三様は「勉強はつとめだぞ。お琴なんか趣味だ。趣味ってのはな、ヒマつぶして事だ」(尾崎ほか1993b: 244)と釘をさす。主人公であるチビ君が階層差に疑問を抱いたり職業的成功によって乗り越えようとしてはいない点が『少女倶楽部』派とは異なり、あくまで日常生活での稽古も踏まえた社交生活の描写に終始している。

5. まとめと今後の課題

本稿では、『少女倶楽部』派／『少女之友』派少女小説における音楽のたしなみの表象を検討してきた。両派において洋楽への憧憬は共通していたが、前者では洋楽のたしなみが成功の結末や敵役の虚栄に結びつき、邦楽が登場しないのに対し、後者では日常生活としての稽古事や社交のための音楽のたしなみが表現され、邦楽のたしなみが洋楽のそれとの差異化を示す役割を担っていた。地方型の前者では、才能の発揮を足掛かりとした上京や出世、ライバルとの立場逆転が、都市型の後者ではきょうだい・親族や友人とのたしなみの差異化や社交への貢献に重点が置かれ、登場人物の音楽のたしなみをめぐる目的、態度、対象等の描写は二派の違いを際立たせる有効な道具立てとして機能していたとも言い換えられる。

今後、特に後者の分析対象を広げたり「令嬢」の表象と比較することで⁴⁾、職業的成功とは別の、女子の芸術・芸能のたしなみそれ自体の機能を明らかにできると考えられるが、この点については別稿に期したい。

【引用文献】(著者姓アルファベット順)

- 遠藤寛子 (1993a) 「解説」尾崎秀樹・小田切進・紀田順一郎監修、遠藤寛子責任編集『少年小説体系 第24巻 少女小説名作集 (1)』三一書房、pp.607-616.
- (1993b) 「解説—私的の少女小説史—」尾崎秀樹・小田切進・紀田順一郎監修、遠藤寛子責任編集『少年小説体系 第25巻 少女小説名作集 (2)』三一書房、pp.541-553.
- 福田委千代 (2003) 「由利聖子『チビ君物語』の世界—『少女の友』の少女小説—」『學苑』749、pp.81-94.
- 樋口覚 (1996) 『三絃の誘惑—近代日本精神史覚え書』人文書院
- 今田絵里香 (2007) 『「少女」の社会史』勁草書房
- 稲垣恭子 (2007) 『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社

4) 音楽のたしなみの表象をめぐる明治後期から大正期の「少女」と「令嬢」の比較については歌川 (2016) を参照のこと。

- (2009) 「武家娘と近代—『女のいくさ』と言説空間」『教育・社会・文化』第12号、pp.1-10.
- 石井洋二郎 (1998) 『身体小説論—漱石・谷崎・太宰』藤原書店
- 岩淵寛子・菅聡子・久米依子・長谷川啓編著 (2015) 『少女小説事典』東京堂出版
- 中村洪介 (1987) 『西洋の音、日本の耳—近代日本文学と西洋音楽』春秋社
- 野口剛 (2009) 「小説『細雪』に見るたしなみ・身体・階級」『教育・文化・社会』pp.11-20.
- 尾崎秀樹・小田切進・紀田順一郎監修、遠藤寛子責任編集 (1993a) 『少年小説体系 第24巻 少女小説名作集 (1)』三一書房
- ・————・————監修、————責任編集 (1993b) 『少年小説体系 第25巻 少女小説名作集 (2)』三一書房
- 佐々木啓子 (2012) 「近代日本における都市中上流階級の階層文化と教育—その理論的検討と歴史社会学的分析枠組みの提示—」『電気通信大学紀要』24巻1号、pp.19-29.
- 高橋美雪 (2001) 「明治期のヴァイオリン—そのイメージと日本特有の受容の諸相—」『一橋研究』第25巻第4号、pp.157-182.
- 玉川裕子 (1998) 「夏目漱石の小説にみる音楽のある風景—お琴から洋琴へ—」『桐朋学園大学研究紀要』第22集、pp.73-91.
- (2008) 「『ピアノを弾く女性』というジェンダー表象—近代日本の場合—」『ジェンダーと表現—女性に対する暴力を無くすためのもうひとつの視点からの試み—』2007年度フェリス学院大学学内共同研究報告書、pp.23-36.
- 歌川光一 (2014) 「戦前期における理想的女子像の『伝統/近代』を捉える視点としての『音楽のたしなみ』—研究動向にみる可能性と課題—」『学習院大学文学部研究年報』(60)、pp.191-211.
- (2015) 「女性と音楽のたしなみの日本近代」玉川裕子編著『クラシック音楽と女性たち』青弓社、pp.200-230.
- (2016) 「近代日本における中上流階級女子のたしなみ像—19世紀末から20世紀初頭東京の音楽文化に着目して—」東京大学大学院教育学研究科博士学位論文
- 安川定男 (1976) 『作家の中の音楽』桜楓社

(うたがわ こういち 初等教育学科専任講師)